には平行タタキ目、底部はほぼ方形状に平行タタキ目を施してナデ消す。

埴輪（第13図42～44）

円筒部の破片のみ。42は横ハケの上に縦ハケを加えて突帯を貼付け、突帯間は、横ハケを施した上から方形の窪みを付す。。方形であろうか、突帯と平行な透孔の一辺が見える。44は、直立した短い口縁部が端部で大きく外反し、いわゆる外削ぎの口唇部をつくる円筒埴輪で、黒斑がある。突帯に平行な透孔の一辺が認められる。ともに外堤第3トレンチの池床堆積土中より出土。

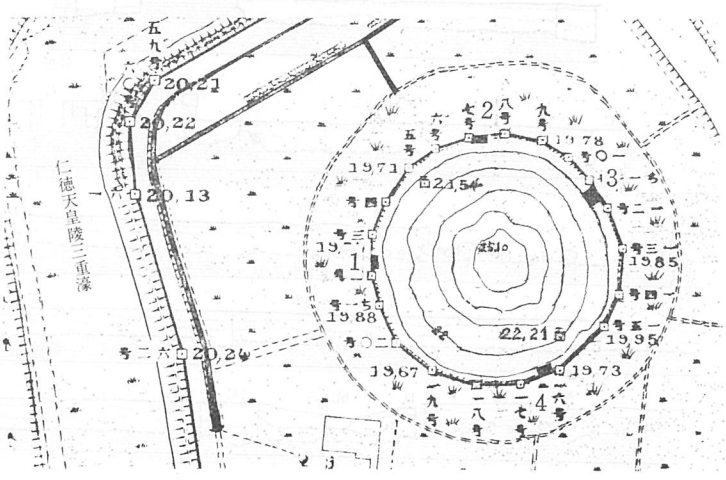
白礫　櫛山古墳後方部などに見られる直径1～3センチの丸い白礫が7トレンチで数個採取された。

（笠野　毅）

三　仁徳天皇陵陪冢ち号外構柵設置区域の事前調査

当陪冢は源右衛門山と称し、仁徳天皇陵後円部の東北に接する径約三四メートル、高さ約五メートルの円墳である。大正十五年測量の地形図には境界外に幅約八メートルの周湟の跡があるが、現在はその痕跡も殆どなく、却つて墳丘裾部に当る境界線の辺に高さ六〇～一五〇センチ盛土されている。外構柵は境界線上に約五〇センチの穴を掘り柱を立てて施工するので、工事による掘削は盛土の部分に止まると思われたが、昭和五十一年二月に事前調査を実施した。調査に当っては四本のトレンチを設定した（第14図）。第一・二・四トレンチは長さ二メートル、幅一メートル、深さ〇・五～〇・七メートルで掘削部分はブロック状粘土、植物性繊維を多量に含んだ腐蝕土を主とし、ビニール、煉瓦、瓦片、スレートなどが混在しており、極く新しい盛土と認められた。第三トレンチは他のトレンチと同じ規模であったが、地表下の攪乱層に径二五センチの土管が埋設されていたので、これをさけて墳丘側に幅を一メートル延長したところ地表下三〇センチに黄褐色の粘性土が認められた。この粘性土層は緩傾斜で、境界線に向けて下向し、やがて急傾斜で落込むので、本来の墳丘の裾から堀への法面である可能性も考えられた。然し工事の掘削は盛土中で処理できると考えられるので予定の工事を施工した。

（戸原純一）



第14図　仁徳天皇陵ち号陪冢トレンチ位置図（1/1000）